



SANZUI vol.02_2013 autumn

特集
色



SANZUI vol.02_2013 autumn

CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。
実演芸術に触れた感動が水の流れるように
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。
そんな思いを込めました。
<http://www.cpra.jp/sanzui/>

02 特集色

04-09 森山開次
沢田祐二／坂本美雨

名匠インタビュー

堅田喜三久

10-11 色いろいろ
ワダエミ／吉村栄一／山本二三
プロマイドのマルベル堂

12-13 美匠熟考
フラメンコカスタネット／銀嶋

14-15 カンゲキのスズメ「寄席」

16-19 裏舞台という名の表舞台
「音をつくる」水野隆弘
「スタイリスト」研

20 若き実演家の未来 / 三浦文彰
瞬演の舞台から / 常磐津節

22 エッセイ
戸田菜穂

24-29 ロングインタビュー
桂歌丸

特集
色

「色」は、もともと色彩を意味する言葉ではありません。
万葉の時代には血縁を意味し、兄や姉を「いろせ」や「いろも」と呼びました。
恋するもの、男女の交遊、女性の美しさ、さらには美しいものの一般名称へ。
そして、さまざまな使われ方を経て、現在のような意味になりました。
いつの時代も「色」は、強く引かれる何かを表す言葉でした。
色彩、色気、音色 — 舞台の上には、魅力的な「色」がいっぱい。
磨かれた技術や道具、そして身体が発する色が、私たちの日常を色づけます。
実演芸術を彩るいろいろな「色」を探してみました。



特集 色

森山開次

「舞台空間を踊りで染める」

Kaiji Moriyama

ダンサー



Kaiji Moriyama × Kodue Hibino × Kohske Kawase "LIVE BONE" Photo / Maiko Miyagawa

観客の脳裏に焼きついた色が
どんな色だったのか
それが一番興味深い



PROFILE 1973年神奈川県生まれ。2001年エジンバラ・フェスティバルにて「今年最も才能のあるダンサーの1人。彼一人を觀に行く価値あり」と評され、ソロ作品の発表を開始。2012年発表『曼荼羅の宇宙』にて芸術選奨文部科学大臣新人賞・江口隆哉賞受賞。演劇・映像・ファッション・写真作品などあらゆるジャンルを横断してクリエイションを重ねている。

骨格や内臓のコスチュームに不思議な音楽。はじめは所在無げな観客も、いつの間にか森山開次さんの踊りに自然と導かれ、惹かれ、巻き込まれ、気がつけば『LIVE BONE』の世界の中にいる。子供番組「からだであそぼ」から生まれたこのパフォーマンス。厳選された色彩がひととき鮮やかに映える舞台空間を、一体どうやって創り上げているのだろうか？

「僕にとって色はとても重要な表現の一つ。コスチュームを着ることは色を纏うことでもあります。昔は衣装を自分で染めていましたが、今では舞台の空間を踊りで染めています。照明で空気に色もつけますが、空間に色がつくように描きながら踊っています。舞台上で動くこと、そこに存在していることで生まれる身体が発している空気の気配や色にこだわっています。この作品では僕とコスチュームが仲良くなる時間が必要でした。踊りの動きとコスチュームはとても密接な関係にあります。身体と一体となった動きで目の前の観客にどんな印象を残せるかが大切だからです。空間にコスチューム、照明、踊りが重なってその時に色合いが生まれる。そして観ている方達の気分によっても色はそれぞれ違うかもしれません。観客の脳裏に焼きついた色がどんな色だったのか、それが僕にとって一番

興味深いことですね」

森山さんは稽古場では黒の上下しか着ない。それにはどんなこだわりがあるのだろうか？

「稽古場で黒でいるのは舞台上で変化するためです。作品の中で衣装を着た時の発見とか喜びもありますし、黒から何かを纏っていくという作業が、人前で踊るという高揚感を高める。着飾るということが楽しみでもあるので、稽古場ではなるべくシンプルでニュートラルにしたい。そして舞台上で踊るといことは人と出会い、自分の色を発見することでもあります」

舞台は観るものだとばかり思っていたが、実は舞台から観られていることでもあった。

「僕も観られています、実は僕も皆さん一人ひとりを感じて観ています。踊りながら観る風景というのも実に楽しくて毎回ワクワクします。踊りというのは求愛の舞が原点ですから、観客と僕が踊りによって引き合い、気持ちが一体となれば、そこに色気も生まれるかもしれません。年齢や時代に依じて踊りも感じ方も自分の色もどんどん変わっていくでしょうが、これからもずっと自分の変化を感じて楽しみながら、観客も自分も、元気になる踊りを続けていきたいと思っています」

沢田祐二

[色はドラマティックでなければならない]

Yuji Sawada
舞台照明家



Photo / Ko Hosokawa

テーマをしっかりと掴んでいれば 自ずと照明や色の イメージは生まれます

舞台の印象は役者や音楽の素晴らしさもさることながら、照明の美しさや意外性、そして色も重要な要素の一つ。舞台照明家として長年第一線で活躍し続ける沢田祐二さんに舞台にあてる光と色について話を伺った。

「色についての僕の基本的な考え方は二つ。一つは、舞台が綺麗であること。もう一つは、舞台のテーマと必ず絡まっていること。綺麗ただけではなく、ドラマティックでなければならない。ただし何でも色を付ければいい訳ではない。極端に言うとドラマを感じさせる場面だけでいい。そして色と光の強弱、方向、光と舞台との一体感、そういうもので照明を構成する。劇団四季の『ジーザス・クライスト＝スーパースター』でも前半に色はほとんどなく、最後だけドラマティックに色を使いテーマを際立たせました」

劇的な色の変化は気持ちを高揚させ、舞台をより印象的にする。色の使い方に決まりごとなどはあるのだろうか？

「色は人の気持ちや感覚に訴えかけます。それぞれの色が与えるイメージがある。しかし私はそうした概念にとらわれることなく、ドラマで感じたことを光と、必要であれば色で表現すべきだと思います。一般的に

は夜は青で表現しますが、赤い夜があってもいい。悲しいことを黄色で表現することもある。色彩心理学にとらわれることなく色は決められるべき。しかしそこには当然、劇としてのリアリティが必要です」

沢田さんの照明や色についての考え方はとても自由でフレキシブルだ。その原点はどこにあるのだろう。

「若い頃日生劇場で関わったドイツオペラの魅力と照明技術に憧れて、1年間ドイツに留学した。一番勉強になったことは、素晴らしい芸術監督のもとで芝居のテーマが統一されていたこと。そして多様性とフレキシビリティが誰にも認められ、常に新しい創造が生まれていました。これが今でも僕の原点。芝居でもミュージカルでも照明の考え方は同じ。何がテーマで何を伝えたいのか、それをプレゼンテーションするのが舞台。テーマをしっかりと掴んでいれば、自ずと照明や色のイメージは生まれます。劇場によっては、デザインを行う上でいろいろと制約がある。もっとも制約が多いほど燃えるものがありますが、この新国立劇場は使い勝手や設備が良く考えられていて、オペラ『鹿鳴館』では新作の生みの苦しみはあったものの、思い通りに光と色を構成できました。これからも常に創造の現場で光と色を求め続けて行きたいです」



新国立劇場オペラ『鹿鳴館』(撮影:増永葉、演出:鶴山仁、美術:島次郎)

PROFILE 東京都出身。ミュージカル、オペラ、バレエ、演劇等幅広いジャンルで照明デザインを行う。『キャッツ』『李香蘭』『エビータ』といった劇団四季のミュージカル、オペラ『ダフネ』(東京二期会)『鹿鳴館』、バレエ『シンデレラ』『椿姫』など新国立劇場のオリジナルも数多く手掛ける。現代演劇では、『シャンハイムーン』(こまつ座)で第18回、『NASZA KLASA』(文学座アトリエの会)で第20回読売演劇大賞優秀スタッフ賞受賞。公益社団法人日本照明家協会会長。

坂本美雨

[芯のある透明色でありたい]

Miu Sakamoto
シンガー／ミュージシャン



Photo / Ko Hosokawa
Text / Eiichi Yoshimura

人の役に立ちたいという欲求が、私に色を与えた

高校生の頃はグラフィック・デザイナーを目指していました。当時から強い色よりは淡い色のグラデーションに惹かれていた。何色ってはっきり言えない色のグラデーションが好きだったんです。

日本語って色を表す語彙がすごく多いですよね。グラデーションの中にあるなんとも言えない色にすごく美しい名前がつけられている。ニューヨークで育ったからこそ、日本語のそういうところが美しいなあといつも私は思っていました。

デビューしてずっと、アーティスト・イメージはCDのジャケットなども含めてモノトーンや暗い色だったりしました。それが変わってき

たのがデビューして10年も経った頃。『ZOY』というアルバムで初めて淡いパステルの色彩をジャケットに使い、それ以降はピンクだったり真っ青だったり、とてもカラフルなイメージになっていきました。

それまで、自分の歌で強く自己主張するということをしたくなかったし、避けていた。自分を出すのではなく、音楽という崇高なものの源泉みたいなところに無私で沿いたいという欲求があったんですね。

ところが、音楽を作る動機が変わって、そういう意識も変化しました。その頃、自分の音楽で人の役に立ちたいという欲求が生まれたんです。デビューから10年たった頃は、実は自分が音楽

をやる意味を見失っていて、なんのために歌っているんだろうという迷いの時期でした。自分の音楽で誰かの役に立ちたいという新しい目的を見つけて、自然と歌もイメージもカラフルになっていったんです。

私の歌声は「透明感がある」と言っていたことが多くいんです。

でも、透明だからメッセージがないわけじゃない。透明は無色じゃなくて透明色という「色」だと思う。透明な水が空を映して青く見えるように、いろんな音やメッセージをちゃんと映し出したり、逆に反発したりという色であるべき。私はそんな自分の声を、きちんと芯のある透明色にしたいと思って歌っています。

PROFILE 1980年東京生まれ。音楽家の両親の下に生まれ、9歳のときにニューヨークに移住。16歳のとき、透明感のある声に注目されて、父の坂本龍一（母は矢野顕子）とのコラボレーションでデビュー。その後ソロ・デビューを果たし、多くのアルバム、シングルを発表。音楽活動以外にラジオのパーソナリティー、テレビのナレーションなど美声を生かしての仕事も多い。また、動物愛護活動にも熱心で、愛ネコの「サバ美」も元野良の保護ネコ。

堅田喜三久

名匠インタビュー

[異色の経験に鍛えられた手色]

Kisaku Katada
長唄囃子方



Photo / Tatsuaki Tanaka

打つときの手の動きによって
音にさまざまな余韻が生じ
日本的な感情と生命を音色に与える

「手色」という言葉があったそうだ。「打つ調子」という意味で、義経記では鼓の名手を指したり、妙なる音色を表す言葉として使われている。長唄囃子物の世界で、伝統を守りながらもジャンルを越えて囃子の魅力と可能性を追求してきた堅田喜三久さんの手色は、圧倒的だ。リズムカルで迫力のある音。鼓を打つ手は素早く軽やかに動き、まるで音に合わせて手が踊っているように見える。その「手色」の原点を探るべく、堅田さんに囃子の魅力について伺った。

「そもそも囃子とは“にぎやかに囃し立てる”という音楽。小鼓、大鼓、太鼓、笛の四楽器を総称して四拍子と呼びますが、主に打楽器で音楽のリズムを高調させます。囃子の魅力は音色の正確さというのが第一にあります。打つ時の手の動きと加減によって振動に変化を呼び、音にさまざまな余韻が生じます。この余韻こそ、いかにも日本的な細やかな感情の機微を醸し出すのです」

堅田さんの鼓を打つ手さばきの美しさ、そして打楽器にもかかわらず響きわたる豊かな音色は、どこからくるのだろうか？

「僕はそもそも左利きです。鼓は右手で打って、左手で操作します。左手は鼓を支えているだけだと思っている方が多いのですが、実は左手が一番重要な役割です。右手で打った瞬間に左手を緩めたり締めたりして、力加減とタイミングで音色をさまざまに変えています。僕は左利きだったからこそ人の半分の年月で修行が済んだ。左利きだからこそ、手の動きを駆使して、多種

多様な音色とリズムやテンポが出せるのです。そして強く打つように見せて小さくて繊細な音を出したり、逆に軽く打つように見せて、ボンと大きな響き音を出したりと、手によるさまざまな技を使っています」

私たちの目も耳も釘付けにする堅田さんの手色は、多様な技に裏打ちされていた。それが可能になったのも、異色の経験があったからこそと話す。

「40年前の僕が一番生意気盛りの頃には、やっではいけないよって言われたことは、何としてもやりたかった。もともと僕はジャズが好きだったこともあり、ジャンルを越えて多くの音楽家と演奏をした。結局技術的にできないと言われていたこと、伝統的にやっではいけないと言われていたことは全部やった(笑)。いつも師匠や先輩には怒られていたけど、この若い時に無理難題をこなしてきたことで表現力を鍛え、演奏に広がりや深さを与えた。これが今に生きています。これからも僕なりの囃子を極めて、多くの方に楽しんでほしい。そして、人間国宝をいただいた時に天皇陛下が僕に直々に“お囃子の素晴らしさを是非海外に伝えて欲しい”と仰いました。その仰せに従って、世界中に囃子の魅力を伝えていくつもりです」

PROFILE 1935年東京生まれ。九世望月太左衛門の次男。十六歳で長唄囃子方に専念すべく、伯父の三代堅田喜治治について修行し、舞台をつとめながら囃物の修業を重ねる。1953年18歳で三代堅田喜三久を襲名。長唄の舞台や歌舞伎の出囃子のほか、ポピュラー、クラシックの演奏にも参加。1990年芸術選奨文部大臣賞。1999年重要無形文化財長唄囃子保持者(人間国宝)。

色いろいろ 色への思い、感じ方は人それぞれ。色へのこだわりが創造力をかき立て、新たな表現を生む。

「赤」の衣装

ワダエミ 衣装デザイナー

映画の中で私がデザインした「赤」の衣装には、三つの思い出がある。

黒澤明監督の「乱」のトップシーンは、最初、使者の衣装は濃紺の直垂であった。ロケ場所は姫路城、六月の緑の樹々の中、馬上で急を告げる使者には見えない。とっさに私は「赤」の直垂に変更した。この「赤」の直垂に代ったことによって「乱」を告げる使者となったのである。

二番目に赤を意識して使った衣装は、ピーター・グリナウェイ監督の「プロスペローの本」である。サー・ジョン・ギルグッドが着る赤のマントは「現在」を表現する。過去を表す黒、未来を表す青と共に重厚なマントには、動物、植物、数学、時間、哲学、天文学をも内在する赤のマントとなった。

三番目の赤の衣装は、張芸謀監督の「HERO」である。この映画は秦の始皇帝に対するテロリストの物語である。何が眞実の話かを表現する為に、衣装を色で語った。赤、青、緑、白、各々の色の衣装。マギー・チャンが着た赤のシルクジョーゼットは、紅葉したポプラの葉が散り舞う中で最も印象に残るシーンとなった。

PROFILE 1937年、京都府出身。1955年京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）卒業。1986年「乱」58回アカデミー賞最優秀コスチュームデザイン、1993年「エディプス王」45回エミー賞、最優秀衣装デザイン賞他受賞多数。



「HERO」Photo / Shozo Nakamura

「青」の音楽

吉村栄一 編集者／ライター

日本語の「青」はさまざまな意味を持つ。「青二才」など、否定的な意味での未成熟、発展途上の「青」も、「青春」という単語になると一転して肯定的な色を帯びる。古代中国で春は青、夏は赤～と色づけされていたことから生まれた「青春」だが、日本の歌でいかに「青春」という言葉が入った前向きな楽曲が多いことか。藤山一郎の「青い山脈」などもこの系譜。Charaの「青」など、自然や地球の豊かさや希望を「青」に例える歌も多い。幾多の「青い鳥」系の歌も同様だ。

その一方、「青」はときに絶望や憂鬱の色としても多くの歌のテーマとなってきた。元ちとせの「青のレクイエム」や浜田省吾の「青の時間」などがそう。andymoriの「青い空」のように、この憂鬱系と前述の自然系を融合させた合わせ技の曲もいい。

そして、この青の複雑な意味合いは英米の楽曲でも同様であるが、それでもプレスリーの「ブルー・ハワイ」のようなポジティブな色合いよりも、やはり英語の「ブルー＝憂鬱」という視点で歌やタイトルにつけられることが多いようだ。バンドの中心人物が自殺したことを知った月曜日のことを歌った、ニュー・オーダーの「ブルー・マンデー」などその典型だろう。

PROFILE 1966年福井県生まれ。月刊誌『広告批評』（マドラ出版）編集者を経てフリーランスの編集者／ライターに。主な編・著書は『風雲巨人軍』（日本テレビ）、『これ、なんですか？ スネークマンショー』（新潮社）、『いまだから読みたい本ー 3.11後の日本』（小学館）など。

朽ちていくもののうつくしさ 「亜麻色」

山本二三 アニメーション美術監督

亜麻色というتماず浮かぶのは「亜麻色の髪の乙女」。金髪なのだけれど派手すぎない感じがして、響きのいい色名ですね。僕が一番好きなのは、植物が枯れていくときの色。枯れた植物は、茶色に近い朽葉色から白っぽく透けたような色になっていきます。それが亜麻色です。光を浴びたような美しい色は、何度も試してやっと出せる色。青々とした緑の中にこの色が少し入るだけで、絵がぐっと豊かになります。

昔はパーミリオンやチャイニーズオレンジのような、もっと鮮やかで強い色が好きでした。転機は大きな手術。全身麻酔から覚めて、目に浮かんだのが亜麻色でした。土や植物の色は、実家が農家だった僕の原点。それ以来、中間色と呼ばれるような自然の色に魅力を感じるようになりました。

現在、新井満さんの写真詩集『希望の木』のアニメ映画化に取り組んでいます。この物語から多くのことを学んだ。何かが朽ちて初めて新しいものが生まれ、死は終わりではないこと。『もののけ姫』（1997）の森のモデルとなった屋久島の倒木も、養分となって新たな若木を育てます。ものの朽ちていくさまに僕が惹かれるのは、その先に未来や希望を感じるからです。（談）

PROFILE 1953年、長崎県五島市出身。「天空の城 ラピュタ」（1986）、「火垂るの墓」（1988）、「もののけ姫」（1997）など、美術監督として数々の名作に携わる。2006年、アニメーション映画「時をかける少女」で第12回AMD Award'06大賞／総務大臣賞を美術監督として受賞。五島ふるさと大使。京都造形芸術大学客員教授。東京アニメーションカレッジ専門学校講師。近著『山本二三風景を描く』（美術出版社）。



正岡子規の孫で樹木医の正岡明さんの俳句選集の表紙として描かれた「樹霊」。杉の木にできた空洞には神が宿ると言われているそうです。「こういう朽ちた木の色に不思議な魅力を感じるんです」と山本さん。

色を想像して楽しむ 「白黒」写真

プロマイドのマルベル堂

これまでにマルベル堂では2600人以上のタレントや歌手を撮影してきました。プロマイドは昔も今も子供の代表という気持ちでずっと撮影しています。先輩からは芸術的な写真は一切考えるなと厳しく教えられました。あくまでも子供の視点。アイドルお決まりの人差し指をアゴに当てて首をかしげるポーズなども子供が手や指先も見たいだろうという思いからです。

今でこそプロマイドもカラーですが、昔は全て白黒写真でした。ライティングも今のようにフラットではなく、白黒で立体感や質感が際立つようにとスポットライトを前髪から頭にかけて、そして肩に当てて光を作っていました。ハイライト7分、シャドウ3分というのが、白黒プロマイド写真の画面構成の基本です。

女性の顔は、ディテールをあまり出さずに飛ばし気味に白っぽくプリントしました。印刷ではなく、一枚一枚手焼きです。手間はかかりましたが、まるでアイドルが目の前に浮き出てくるように感じられたはず。白黒は色がない分、見る人がいろいろな想像を膨らませることが出来ます。見ていて飽きませんし、いつ見ても新鮮に見えます。白黒のプロマイドの美しさを是非もう一度味わって欲しいなあ。（談）

PROFILE 俳優やアイドルなどのスターの写真『プロマイド』の撮影・販売をする老舗。1921年（大正10年）東京浅草に「マルベル堂」を浅草仲店に創業。これまでに撮影したスターは約2,600名。現在保有しているプロマイドの種類85,000版。

小林伴子 (フラメンコダンサー)

フラメンコカスタネット

フラメンコカスタネットは、2枚のパーツをそれぞれ束ねた紐を両手の親指にかけ、左右一組で演奏します。残りの指が自由に使えるようになった為、技法が飛躍的に進歩。弾き方によって1オクターブぐらいの音の幅も有り豊かな表現のできる“楽器”です。脇役のイメージですが、フラメンコ舞踊ではカスタネットを主役として使うナンバーもあり、サパテアード(足音)を踏み鳴らしカスタネットをかき鳴らし行うギターとの掛け合いは大変スリリングで、フラメンコ舞踊の醍醐味を感じる瞬間です。

カスタネットが大好きな私は、シンプルであるがゆえに弾き手の表現力が確実に現れるカスタネットの音に耳を澄まし、集中し、大切に付き合ってきました。そのことはカスタネットのみならず、私のフラメンコの世界を大きく広げてくれました。カスタネットから学んだ事は計り知れません。



協力:一般社団法人日本フラメンコ協会

Number:003

Flamenco castanets

ドルフィン (マジシャン)

銀鳩

鳩がマジックの世界で注目され、本格的に使われるようになったのは、1960年に公開された『ヨーロッパの夜』という映画から。燕尾服を着た長身のチャニング・ポロックというマジシャンが鳩を使ったマジックを存分に披露しました。それまでもマジックの一部で鳩が使われたことはありましたが、エンターテイメントとして鳩が主役のマジックはこれが初めてです。

マジックで使われるのは『銀鳩』と呼ばれる人工的に育てられた特別な鳩。調教は生まれてから一ヶ月以内に始まります。まずは手乗りにしてそれぞれの鳩の気性を見極め、マジックでの役割に応じて仕込みます。じっとしているのが得意な鳩もあれば特殊部隊もいます(笑)。鳩は嘘をつかないし、文句も言わない。それだけに僕たちマジシャンも鳩と真剣に向き合っています。鳩は僕らの大切なメンバーですからね。



協力:公益社団法人日本奇術協会

Number:004

Dove



落語とは「滑稽」な話しであり、オチ（下げ）がつく話芸である。題材は身の回りの世間話からお伽噺まで幅広い。手拭いと扇子だけを小道具に使い、1人で何役もこなし、巧みに客を話しに引き込んでしまう。落語は戦国時代に生まれ、時代の空気を取り入れながら長い時間をかけて日本人の心に染み込んできた。子供も大人も楽しめる、いわば笑いの原点ともいえる。秋から年末、正月のおめでたい初席（はつせき）にかけて寄席の演目も充実し、落語会も多数開催される。泣いて笑って、落語の魅力にどっぷりと浸かってみたい。

一年中落語を楽しめる笑いの殿堂

落語は伝統芸能といわれているので、格式が高く見方が難しいのではないのか？そんな心配はご無用。常打ちの寄席に行けば、一年中いつでも落語を楽しめる。一ヶ月を上席、中席、下席と10日ごとに分け、それぞれ出演者と演目が替わる。一日の中でも昼の部と夜の部があり、こちらも出演者と演目が替わる。入り口で木戸銭を払い、中に入ると正面に高座と呼ばれる演芸をする舞台がある。寄席は全て自由席。どこに座ってもいい。落語家の息づかいを聞くなら一番前のかぶりつき。高座と観客の一体感を楽しみたいなら後部座席がお薦め。落語の見方に決まりごとはない。とにかく気楽に一度足を運んで腹を抱えて笑って欲しい。クセになること間違いなし。



寄席太鼓は縁起物！

寄席では太鼓によっても気分を盛り上げてくれる。開場と同時に前座が「大勢いらして下さい」との願いを込めて大太鼓を打ち込む。最初に太鼓の縁をカラカラカラと叩くのは、木戸口が開く音。そして「ドンドントコイ、金持ってどんと来い」と聞こえるような打ち方をする。そして打ち上げる最後のところで、長バチを〔入〕という字の形にして太鼓の表面を押さえる。「大入り」になる様にとの縁起かつぎだ。終演時に打つのがハネ太鼓、追い出しとも言う。「デテケ（出てけ）、デテケ」と打ち、木戸を出て客はいろいろな方角へ帰るので、「テンテンバラバラ、テンテンバラバラ」。客席から客が全員出たら、太鼓の縁をたたいて、「カラ（空）、カラ、カラ」と打ち、最後に太鼓の縁をバチでこすって、「ギー」と木戸の鍵を降ろしたという擬音を出して、その日の興行が全て終了する。

出囃子とめくりも笑いの引き立て役

寄席では落語家をメインに色物と呼ばれる落語以外の音曲、手品、漫才、曲芸などの芸人が次々と高座に上がって楽しませてくれる。次に誰が出るのかがわかるように前座が「めくり」と呼ばれる高座の端に置いてある名札をめくる。寄席文字と呼ばれる独特の書体で書かれており、江戸情緒と粋さを醸し出す。そして落語家が続いて高座に上がる場合は、高座返しといって前座



が座布団を必ず引っ繰り返す。出囃子に乗って落語家の登場。出囃子とは楽屋で演ずる三味線のお囃子のことで二つ目と真打ち（落語家のランク）の落語家ごとに曲が定まっている。落語通になると出囃子を聞くだけで誰が出てくるのかすぐわかる。



寄席にはお弁当が良く似合う

医学的にも笑うことは体に良い。免疫力をぐんと上げて、体も脳も若返ることが証明されている。笑うと代謝が良くなり、食欲がわいてくる。落語で立て続けに大笑いすると当然体力を使い、お腹が鳴ってくる。寄席の楽しみの一つは食事である。昼の部でも夜の部でも3~4時間の長丁場。食事をしながら笑いを堪能するのが粋というもの。寄席の売店にはお弁当が用意されている。助六寿司などが定番中の定番。もう一つのお薦めは、デバ地下での事前調達。寄席の近くにはデパートが多い。食品売り場では、お弁当は選り取り見取り。好みの美味しい弁当を手にいざ寄席に出陣！ただしアルコールは寄席によって禁止のところもあるのでご注意ください！

寄席・演芸場

鈴木演芸場(東京)	東京都台東区上野2-7-12	03-3834-5906
新宿末廣亭(東京)	東京都新宿区新宿3-6-12	03-3351-2974
浅草演芸ホール(東京)	東京都台東区浅草1-43-12	03-3841-6545
池袋演芸場(東京)	東京都豊島区西池袋1-23-1	03-3971-4545
国立演芸場(東京)	東京都千代田区準町4-1	03-3265-7411
お江戸小路亭(東京)	東京都台東区上野1-20-10	03-3833-1789
お江戸日本橋亭(東京)	東京都中央区日本橋本町3-1-6 日本橋永谷ビル1F	03-3245-1278
お江戸両国亭(東京)	東京都墨田区両国4-30-4 両国武蔵野マンション	03-3833-1789
横浜にぎわい座(神奈川)	神奈川県横浜市中区野毛町3-110-1	045-231-2525
天満天神繁昌亭(大阪)	大阪府大阪市北区天神橋2-1-34	06-6352-4874
大須演芸場(愛知)	名古屋市中区大須2-19-39	052-221-1782

その他、全国各地の劇場やホールでも随時落語会が開催されている。

裏舞台 という名の 表舞台

舞台は客席から見える表舞台と
見えない裏舞台によって
成り立っている。
舞台を裏で支える人に光を当てる。



Photo / Anna Hosokawa

STAGE 03

音をつくる

Sound Creation

水野隆弘 (ヤマハ株式会社)

Takahiro Mizuno
(YAMAHA CORPORATION)

日本に初めてピアノが紹介されたのは、1823年。そして明治維新(1868年)以降、多くのピアノが輸入されたが、現在では日本製のピアノは世界中で高い評価を受けている。今では家庭や学校、各地のコンサートホールなどにもピアノが設置されているが、難点は持ち運びができないこと。そのため、本番の前には、聴衆に最良の音が届けられるように、いつも調律師が裏方で奮闘している。楽器の製造と美しい音づくりについて、日本での先駆けとなった静岡県にある

ヤマハ株式会社の掛川工場で、グランドピアノの音づくりの最終行程(整音)を行っている水野隆弘さんにお話を伺った。「この掛川工場ではアップライトピアノも含め、全ての国産ヤマハピアノを製造しています。木材を乾燥させ、各パーツに切り出したもの、弦、弦を支える金属製のフレームなど、ほとんどの部品もここで作られ、組み立てられていきます。そして最終的な仕上げとなる組み立てと音の調整が行われます。それが私の仕事です。88個の音を

鳴らすのは、ハンマーと弦。鍵盤からその動きを伝達するのが個々のアクション部品。それら88鍵分を全て手作業で取り付け、0.1ミリ単位で調整し、さらに全体のバランスを整えます。それぞれ熟練したスタッフのブースを3週間ほどかけて順に回り、ようやく1台のピアノが完成。自動車関係者が視察に訪れたときに、こんなにも手作業でやっていて、効率的ではないですねと驚いてました」

これほど人間の感覚や感性が多くの過程において必要とされる工場は、現代では珍しいかもしれない。それだけ1台1台に注がれる愛情も大きくなる。

「私は31年前、調律師学校卒業後にヤマハに入社し、国内外の現場で数多くの経験を重ねてきました。楽器の弾き心地は、アクションの調整(整調)で微妙に変化します。弦を弾くハンマーが堅ければ堅い音、柔らかければ柔らかい音になるので、針を刺してハンマーに弾力をもたせ、調整可能な範囲で演奏者の好みにできるだけ近づけるようにします。「カラフルな音」、「華やかな音」と演奏者の抽象的なリクエストを推し量りつつ、具体的な作業につなげていきます。ピアノは、1台1台音色や弾き心地が異なるため、コンサートやレコーディングの際に、ホールの所有するピアノではなく、別のピアノを運び込むこともあります。世界で活躍するピアニストの音に対する

こだわりはシビア。本番でどのピアノを使用するかは、われわれ楽器メーカーにとってまさに一大事です」

世界を代表するピアニストとの真剣勝負がヤマハのグランドピアノを育てているのだろう。

「楽器は、気温や湿度、ホールの大きさといった環境で客席に届く音が変わってしまいます。ピアノが気持ちよく鳴るように調整するのが、私の一番目指すところです。調律のみであれば2時間でできますが、弾き心地や響きを整えるために、さらに時間は欲しいです。理想を求めていけば、いくら時間があっても足りないくらいです」

個々のピアノの状態に応じて限られた時間で最良の処方をする、水野さんの仕事は、アスリートのトレーナーのようだ。

「音楽が大好きで、多くの演奏を聴き、美しい音のイメージを追求しています。これまでの経験を活かして「美が響き力」をコンセプトに、新しいピアノの開発にも携わっています。最高の素材と技術をかけて2010年から世に出たCFシリーズ。演奏者にも、その音楽を聴く観客にも満足してもらえることを第一として開発しています。この最高のピアノに最適な調整を探ることが私の目下の目標です。これからもさらに腕を磨いてヤマハのグランドピアノとともにピアニストの素晴らしい演奏を支えていきたいと思っています」



PROFILE 1887年、山葉寅楠氏がオルガン修理に成功したことをきっかけに、創業。1900年にピアノの製造を開始し、1954年にはオルガン教室を開校し、全国に展開。1987年に社名をヤマハ株式会社に変更。現在では、インドネシアや中国にもピアノ工場を設置し、世界中にピアノが届けられ愛用され続けている。

スタイリスト

Stylist

研

Ken



Photo / Anna Hosokawa

舞台やライブ、そしてプロモーションビデオなどで繰り返されるパフォーマンス。そして、それぞれの場で、パフォーマーを最大限に引き立ててくれるのが衣装である。見る者のイメージを広げ、パフォーマーの個性や演技をより印象的にする衣装を創り上げるのがスタイリストという仕事。観客の心に残るパフォーマンスを影で支える極めて重要な役割だ。テクノポップユニット・Perfumeをはじめ、広告や舞台でも活躍中の研さんにお話を伺った。

「スタイリストと一言と言っても、仕事の仕方はさまざま。既製服を組み合わせる場合もあれば、一からイメージを創り上げていく場合もある。僕は物づくりが大好きなので、イメージ創りから縫製まで自分でやってしまうことが多いですね。最初に自分のアイデアありきではありません。話を聞きながら相手のやりたいことをシャープにしていきます。つまり絶対に着る人ありき。その人のキャラクターや、場所、時間帯、方向性、そういうことをソースにして、なるだけわかりやすくわかりやすいというのが僕の基本的な考え方です」

研さんは、出演者の個性はもちろん、音楽や動き、色、光、カメラワークなどあらゆる視点から衣装の役割をとことん考えているように見える。それはなぜなのか？

「専門学校ファッション産業科を卒業してイベント制作会社に入社しました。当時

はバブル全盛で、いきなり年間230本ものイベントの制作ディレクターをやらされました。ところが翌年にバブル崩壊。予算がなくなり、衣装も自分で作らなければならぬ。もう毎日冷や汗ものでした。しかもイベントは、忙しいけれど作品が残らない。そこで会社を辞めてフォトプロダクションで光やカメラワークを学んだ後、あるタレントさんのところにお世話になりました。その人のこだわりが半端ではない。もう徹底的に衣装のことを叩き込まれました。イメージをすぐに形にしてと言われるのですが、そのレベルが高すぎて(笑)。本当に勉強になりました」

研さんの作品の絶妙なバランス感覚は、現場での厳しい仕事と緊張感を通して培われたようだ。衣装の色はどのように決めているのだろうか。

「何でも見ます。雑誌やインターネットも見ますし、山や川に行って自然の色も見ます。そして、他のところで使われていない色を使います。仕事ですから、あまり極端な色はNGを出される場合もある。そういうときも、光の当て方や素材で何か変化をつけられるようにしています。Perfumeの場合、引き受けたときは全くイメージがない状態でした。そこで、一曲ごとに雰囲気を変えるのではなく、同じことを三回やりました。それまでは同じような曲調なのに毎回ビジュアルを変えていた。でも、まず

は覚えてもらうことが先だろうと考えたんです。音楽は『思い』ですから、聴くと赤や黄などの色が思い浮かびます。でもビジュアルはあえて白を選びました。これはキャンパスの色です」

本人たちとファンの反応を見ながら、常に半歩先を進むことを意識して進めていったのだという。

「チームで意見を共有したりはしません。そこに向かってそれぞれの仕事をやっていただけです。関わっているみんなが完成形をわかっていたから、それで良かったんで

す。『ポリリズム』のPVを撮ったときはそのバランスが最高でした。今は広告の仕事がほとんどですが、木の実ナナさんの舞台衣装なども担当させていただき、少しずつ世界が広がっています。現状では長期間携わる仕事はなかなかできないのですが、いずれは映画や舞台全体の衣装にじっくり取り組みたいですね。その時に備え、引き出しはたくさん用意しています。時間が少しでもあると、あれこれイメージを膨らませて自分でデザインし縫製しています。やはり物づくりこそが僕の原点だからです」



(左から時計回りに) Perfume『Game』、yozuca*『asterisk music』、GRANRODEO『DARK SHAME』のCDジャケット写真
PROFILE 1991年、株式会社ギミックインターナショナル入社。アパレルカタログの製作、ファッションショー、ファッションイベントの制作を行う。1994年、フォトプロダクションにて、スタイリストとして、広告、音楽、などのビジュアル制作などを担当。1998年、フリーに。2003年4月から2004年5月までの1年間、アパレルデザイナーとしてロサンゼルスにて活動。2013年現在、広告、ミュージシャン、女優を中心に衣装デザイン、スタイリストとして活動を行っている。http://kenuchizawa.com

ヴァイオリニストの王道を歩む

Photo / Anna Hosokawa

三浦文彰
Miura Fumiaki



音楽一家で育ち、演奏家になりたいと強く意識したのは10歳の頃。歴代のヴァイオリニストの名演奏を集めたDVDの個性豊かな演奏に衝撃を受け、これだと思った。作曲家の意を汲み、ヨーロッパの伝統的な音楽を深める。そして、音色の追求にも貪欲だ。「音楽は、意欲次第でいくらでも上手くなるし、満足することがないから続けられる。年齢によって味わいが変わって

るのも魅力」と語る。近年では、ヴィオラにも挑戦。室内楽をやることで、まわりの音の聴き方が変わり、視野が広がった。指揮の視点からもオーケストラの勉強をしたいと、音楽への意欲はとどまらない。これからは「一般の人に、クラシック音楽をもっと身近に感じてもらえる活動も」という。10年後は？「いい演奏を重ねていきたい。その延長に未来はある」

PROFILE 東京都出身。ヴァイオリニストの両親のもと、3歳よりヴァイオリンを始める。2009年、ハノーファー国際コンクールにて史上最年少で優勝。聴衆賞、音楽評論家賞も同時に受賞。国内外の音楽祭への参加や各国のオーケストラとの共演を重ねている。2009年度第20回出光音楽賞受賞。2011年CDデビュー。現在、ウィーン私立音楽大学に在籍。

ストーリーに重きをおく『語りもの』の代表

Photo / Masao Ohmi



「常磐津節の魅力は、語りの楽しさ」と常磐津清若太夫さん。語り手である太夫と三味線方とで演奏する浄瑠璃の一派。江戸で生まれ、歌舞伎の舞踊劇の伴奏音楽として発展。同じ江戸浄瑠璃の清元節が江戸の町の雰囲気を取り除くのにに対し、常磐津節の演目には物語がある。「時代とともに上品さが求められて唄の要素が強くなったが、もともとはストーリーに重きをおく『語りもの』の代表なのです」

常磐津節の演目には、足柄山で母親と暮らしていた金太郎が源氏にスカウトされて都で侍大将になる『山姥』など、多様なキャラクターが登場。それを衣装・かつらなど一切つけず、座ったまま演じ分ける。「お姫様からお爺さんまで、声だけで何にでも変身します」かつては一般的な習い事のひとつだった常磐津。「いまは触れる機会が減っていますが、栄養を摂るようなつもりで味わって聴いてほしいですね」

常磐津清若太夫(ときわづきよわかたけ)＝幼少より父・藤間光之助のもとで日本舞踊を修行。1957年より四世常磐津松尾太夫に師事し、1965年に清若太夫の名を許され師範に。2000年に重要無形文化財常磐津節(総合認定)保持者に認定される。常磐津協会理事。

アートディレクターの眼

最近色々な公演のフライヤーが面白くなって来ている。ここでは10月から12月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



(実際のチラシは横位置。使用写真のみ縦位置で掲載)

『維新派 MAREBITO』
(瀬戸内国際芸術祭2013参加)
2013年10月5日(土)～14日(月祝)
岡山・犬島 海水浴場
構成:松本雄吉/音楽:内橋和久
デザイン:東學(188)/写真:井上嘉和

人が手を繋いで海岸沿いに立って撮影されたこの写真を見た時には、無性にこの公演を見たいと思った。フライヤーには公演内容が書かれていないのだが、わざわざ公演会場である犬島で撮影されたと思われるこの写真だけで十分である。会場には船を使って行くのだが、それも魅力的だ。

新村則人＝アートディレクター。1960年山口県生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品キャンペーン、エスエス製菓、東京オリンピック招致など。



『あいちトリエンナーレ2013 パフォーミングアーツ』
2013年8月10日(土)～10月27日(日)
愛知芸術文化センター・まちなか会場他
デザイン: POWDER DESIGN

多くの実演家が出演するフライヤーは、メインビジュアルをどうするか?出演者の名前をどう入れるか?などと色々悩むと思うのだが、象徴的なシルエットを使ったこと、そして出演者の名前をブルー1色で大きく入れることによりメッセージ性の強い素敵なフライヤーに仕上がっている。

BOOK



『せんはうたう』
詩 谷川俊太郎
絵 望月通陽
ゆめある舎 1890円(税込)

音楽をモチーフに、シンプルな線で描かれた世界が、言葉によって紡ぎ出される。ソングブック用に描かれたスケッチブックから生まれた詩集。ページをめくるごとに想像が広がり、人を愛する気持ち、生き物への愛おしさが柔らかく伝わってくる。優しい世界の詰まった冊子は、丁寧に綴じられ、濃い青色の表紙にくるまれている。ケースに入って、とっておきのプレゼントにも最適の一冊。ゆめある舎ホームページには、制作日誌も。
<http://www.yumearusha.com/senhautau/>
(スタッフ 大井優子)



『あやつられ文楽鑑賞』
三浦しをん
双葉文庫 630円(税込)

直木賞作家、三浦しをんさんが文楽の魅力伝えるエッセイ。現代人には理解しがたい登場人物の台詞に鋭い突っ込みを入れ、うまい義太夫ほど良い睡眠が得られると力説する。なかなか聞きにくい素朴な質問を出演者に直接ぶつけ、人物的魅力も引き出す。楽しい文章の中にも鋭い指摘、文楽への深い愛が光っている。伝統芸能は敷居が高いと敬遠する人も、本書を読めば文楽を見たいこと間違いなし。同書の取材を通じて生まれた小説、「仏果を得ず」も併せてお勧め。
(スタッフ 榎野睦子)

PRESENT



A.
大笹吉雄サイン入り本
『最後の岸田國士論』
中央公論新社 2,100円(税込)
5名様

現在、戯曲賞に名を冠する岸田國士。軍人の家庭に育つも演劇を目指す。終生、演劇には何が要るかを問い続けた岸田の「演劇革新」という到達点を大笹・SANZUI編集顧問が解明する。



B.
森山開次
サイン入りTシャツ
Mサイズ・Lサイズ
各2名様

今号の巻頭に登場していただいたダンサー、森山開次さんによる「からだ」をモチーフにした素敵な舞台『LIVE BONE』オリジナルTシャツ。これを着て、みんなで楽しく踊っちゃおう!

[プレゼント応募方法] SANZUIウェブサイト(<http://www.cpra.jp/sanzui/>)よりお申し込みください。締切は2014年1月10日(金)。当選のお知らせは、発送をもってかえさせていただきます。





エッセイ

戸田菜穂「体感の楽しみ」

Illustration / Asuka Kitahara

私には娘がいる。一歳半だ。この頃ようやく外で歩くようになり、毎日娘と公園や川沿いを散歩している。すると自然と視線が下になる。一緒にしゃがんでみると、石ころや、草や、マンホール、セミの羽、ありんこ、木の根っこ等が視界に入ってくる。人間は上へ上へと目指していくものだが、あらためて地面近くで子供と同化している時間が今とても楽しい。石を投げては拾ってまた投げてをくり返している娘。犬が来たら「ワンワン」と言って近寄り、ちょんちょんと触らせてもらっている。「メープルちゃん」と「マロン君」は常連だ。それから「はっば」と言って、草や枯れ葉を拾っている。こうやって、物には名前があることを学んでいるのだと、感心する。

我が家は二階で、目の前は森のように木々が生い茂っているの、東京の中の軽井沢と呼んで私は気に入っている。春夏秋冬、朝昼晩、どの季節もどの時間も緑は美しい。

なるべくなら土に近い場所で暮らしたい。土と、植物の生命力を目の当たりに

していたい。

この頃、私はわざと不便さを求めたりする。撮影所まで歩いて行ったり、各駅停車に乗ってみたり、手の込んだ料理を作ってみたり。スピードがゆっくりだと見えてくる景色がある。立ち止まることも引き返すこともできる。料理も、コトコトと煮えるのを待つ過程が実は楽しい。パーッと過ぎていく時間を、手元に引き寄せたくなる。しっかり見たい。見過ごしたくない。

私はパソコンをほとんど開かない。見た気に、知った気に、行った気になるのが怖いから。80センチの娘の高さで風景を見渡し、実際に体感することがいかに大切に痛感している。

土は、人を育て、やがて、人は土に帰る。ならばその間、思いきり生きていたい。

俳優の仕事で、いいなと思うところは、激しく心が動くこと。それに尽きる。

とだ なほ=女優。1974年、広島県生まれ。1993年、NHKの連続テレビ小説「ええにょぼ」に主演し、人気を博す。現在まで数多くのドラマ、映画、舞台に出演し、存在感のある演技派女優として活躍中。趣味は俳句、三味線、小唄、ボクシング。ワインへの造詣も深い。

SANZUI ぱっしょん | この仲間とだから、映画が撮りたい! ~神奈川県立大磯高校SF研究部~



約10年の活動休止期間を経て2009年に活動を再開させた立役者は、顧問の小澤大輔先生。「弟が部員だったこともあり、活動内容を誰よりもよく知っていたし、高校生で映画が作れるなんて羨ましいなって。大げさだけど、磯高に赴任したのは、S研を再開しろ、という神様からの使命だと思っている」。部員をかき集め、ほぼ新しい部を立ち上げる形で、何とか再開にこぎつけた。それがわずか4年の間に、総勢約30名の大所帯に。「何より部員たちの周りを巻き込む力がすごいんです。学校の雰囲気を変えているし、今では先生の間にもファンがいますよ」。YouTubeで作品を見て、S研に入りたいから磯高に入ったという部員もいるとか。

作品の内容は各学年の監督を中心に皆で話し合って決める。家庭用ビデオカメラを片手に、イメージ通りの撮影場所を求めて、東京さらには群馬まで。映画作りの楽しさは? 「作品を観て笑っ

てもらえるところ」「自分が頑張っていた高校生時代が映像として残るところ」「自分の考えを素直に外に出せるところ」。S研は、部員たちにとって「クラスよりも居心地がいい家のような場所」のようだ。部長の志田小鼓音さんは語る。「映画って、もう一つの現実世界。自分が直面している悩みを混ぜ込んで表現がしたくなるんです。作りたい作品が多すぎて、時間が足りないのが悩みの種です」。

そんな志田さんの将来の夢は、「教員になりたい。磯高に赴任して、S研の顧問になりたい」。S研という『場』を愛する心から出た素直な気持ちであった。

そんな彼らの活動は、映画甲子園の入賞、神奈川県警イベントへの協力等、学校を飛び出してどんどん広がっている。さらにもう発展していくのか、今後がますます楽しみです。

編集後記

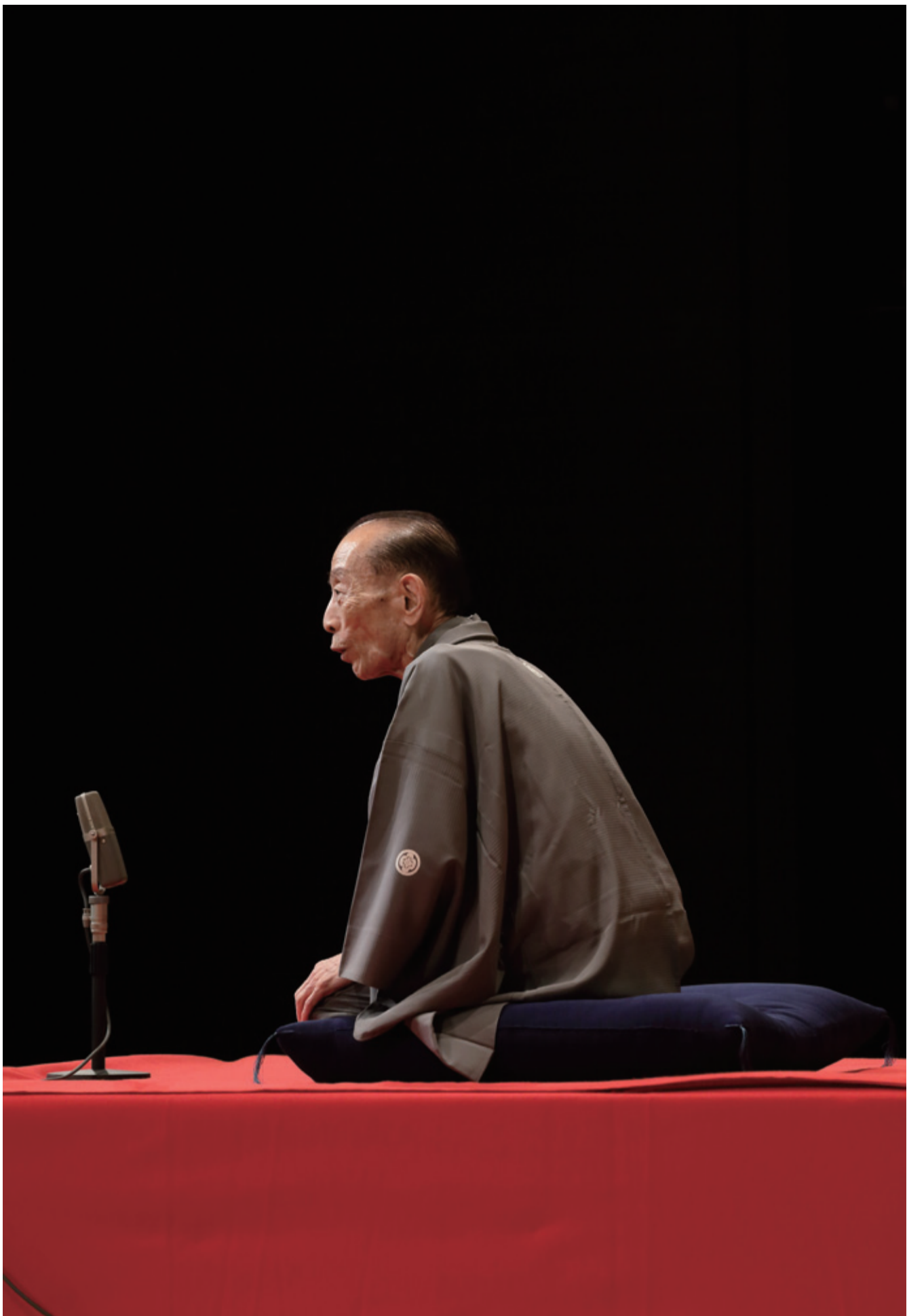
いろはにほへとちりぬるを…。昔の日本人が仮名を覚える際の最初の言葉は、「いろ」だった。「花」という意味らしい。顔色、音色、色気、色々。普段何気なく使っているが、あらためて色という言葉調べ、その意味合いの広さに驚いた。古くは、色衣(いろいろも・晴れ着の意)や色様(いろさま・美しい人の敬称)、本編にも出た手色(ていろ・鼓を打つ調子)なども。色とは、視覚、嗅覚や聴覚と印象感覚が重なり合った共感覚的な言葉だ。

アーティストは「自分の色」が求められる。何百年も型によって継承されてきた芸能でさえ、その型の隙間から滲み出る演者の色こそが味わいであり、楽しみになる。私たちは、俳優の香りではなく色香に酔う。オーケストラの音ではなく音色に感じ入る。囃子方の手ではなく手色に心を震わせるのだ。実演芸術の醍醐味は、その「色」と表現される感覚そのものだ。世阿弥がちょうどそれを、「花」と表現したように。(満)

森山開次さんはダンサーとしての役割を「『一緒に頑張って生きていこうよ』と呼びかける応援団の先頭」と喩え、三浦文彰さんは「クラシック音楽をもっと身近な存在にするためのシンボルになりたい」と仰いました。表現者の凄味を感じた二つの言葉です。実演芸術に関わる方々にお話を聞かされた「この人たちが舞台で見なくては!」という焦りにも似た気持ちにかられます。これが読者のみなさんにも伝わっていたらうれしいなと思います。(ずみ)

発行:公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権センター(芸団協CPRA)
<http://www.cpra.jp>

発行日:2013年10月1日
発行人:浅原恒男(芸団協常務理事 広報担当)
編集人:松武秀樹(芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUIプロジェクトチーム
一般社団法人日本音楽事業者協会/鈴木明文、
一般社団法人日本音楽制作者連盟/板垣一誠、
芸団協CPRA/小林俊範、榎野睦子、大井優子、小泉美樹、川崎佑
編集者:山縣基与志(JAPANOLGY-MUSEUM)
アートディレクター:新村則人
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)
協力:新国立劇場、一般社団法人日本クラシック音楽事業者協会、
公益財団法人 江東区文化コミュニティ財団 砂町文化センター、
(有)ジューゲムスマイルズ、イノホール、横浜にぎわい座



噺家になるきっかけと入門まで

話し言葉がこんなにも綺麗で心地良
いと感ずる人はそうはいない。高座で
の歯切れのいいテンポあるしゃべり。
そして情景がありありと頭に浮かんで
くる絶妙の間。これぞ名人芸の極みと
いつてもいい。落語という芸一筋に打
ち込み、長年言葉一つで世の中に笑い
と人情の機微を伝え続けてきた。近年
では、滅多にかからない演目の発掘や
三遊亭圓朝作品などの古典落語にも光
を当て、落語の奥深さをさらに極めよ
うとしている。何がこれほどまでに落
語に打ち込まれるのか。落語の魅力と
噺家としての思いを桂歌丸さんになつ
ぷりと伺った。

——小さい頃に落語家になる決心をさ
れたそうですが、きっかけは？

あたしが小学生の頃は、戦後すぐで
世の中に何の笑いもない時代。あるの
はNHKのラジオだけ。当時週に二回
ほど寄席の番組があり、今は亡き昭和
の名人といわれる噺家達が出演し、毎
回それはもう沸かしていましたね。そ
れを聴いて、人を笑わせる仕事をやっ
てみたいと。うちが華やかな商売だっ
たこともあり、あたしも小さい時分か
ら大変陽気な人間でしたからね。俺は
絶対落語家になるって小学校四年生の
時に決めた。あたしは祖母に育てられ
た。祖母に小学校出たら噺家になるっ
て言ったんです。そうしたら祖母が
みっともないから頼むから中学校だけ
は行ってくれって。それでいやいや行
きました(笑)。

——中学校でもみんなの前で落語を
やっていたのですか？

その頃は今みたいに体育館などなく
て、体育の時間に雨が降ると自習だっ
た。自習っていったって何も無い。鍵
盤の壊れたオルガンが一台だけ。何か
遊びをやったり歌を歌ったりしてい
たのですが、ある時、あたしが落語を
やった。これが大受け。それからとい
うもの雨の日の体育の時間は毎回あた

しの独演会。そのうち他のクラスの子
まで先生のところに来て、あたしに落
語やって欲しいから貸してくれって。
すると先生は「じゃあ行ってこい」で
すからね。あたしは真面目に数学の授
業なんかを受けているのに(笑)。当時
あたしが育ったのは色町で映画館も
あった。そこで暮れるになると特別に演
芸がかかった。あたしが覚えていたの
は、先代の三遊亭圓歌師匠と可笑師匠。
それに漫才の隆の家栄竜・万竜も記憶
にあります。その時、圓歌師匠が『ボ
ロタク』をかけた。それが当時のあた
しの十八番。もちろん今みたいに録音
なんかありませんが、一回か二回聴く
とたいがい覚えちゃった。あの頃の記
憶力が欲しいですね(笑)。今は何十回
聴いても覚ええないから。でも落語が心
から好きで楽しかった。それは今も
ずっと変わりません。

落語修行の厳しさと面白さ

——昔から歌舞伎をよくご覧になっ
ているのは落語の修行のためですか？

これはね、大師匠の古今亭今輔に、
あたしが入門した頃からとにかく歌舞
伎を観る観るって言われたから。なぜ
かという、間の勉強。例えば台詞の間、
鳴り物の入る間、歌舞伎にはそういつ
た間がたくさんある。歌舞伎の役者衆
はいいですよ。相手がいるんだから
一人だけです。一人で何役もやるか
ら間が悪いと受けない。お客さんが
乗ってこない。この間を覚えろって
いう意味で歌舞伎を観るって大師匠は
言ってくれた。そのうちにね、あたし
がひよっと気がついたのが型の大切さ。
噺家は扇子と手拭いだけ。小道具はあ
りませんよ。扇子を刀にしたり、徳利
にしたり、槍にしたり、とにかくいろ
んなものに使います。手拭いは紙入れ
だの手紙もそうですし、これもいろい
ろ使わなければならない。さあ煙草を
一服するにしてもいろんな吸い方があ

俺は絶対落語家になるって

小学校四年生の時に決めた

桂歌丸

Katsura Utamaru

あたし達の商売は早く自分の間を こしらえたものが勝ちですね



る。例えば侍の煙草の吸い方、町人の煙草の吸い方、町人でも大店の旦那の吸い方と番頭の吸い方はまた違います。煙草の吸い方一つとってみてもそういう型を歌舞伎で観ておけば落語の噺の中で生きてくるのです。

——女の色気、男の色気なども歌舞伎から学びましたか？

これが歌舞伎を観て一番参考になつたかもしれませんね。あたしは男ですが、噺家だから女性も演じなきゃいけない。いくら裏声は出しますけど声はどうやったつて変えようがない。じゃあどうすればいいか？歌舞伎の女形の芝居を観ていてひよいと気がついた。目でしゃべればいい。相手を正面から見て真っ直ぐ目を見て話せば男に見える。ところが斜に構えて横目で見ればしゃべれば女に見える。まあ男の色気も女の色気も目。どっちにしろ目が色気が一番の眼目じゃないですか。

——舞台でのキャラクターの演じ分けもとても難しいのではありませんか？
落語はたった一人で本当にたくさん役柄を演じなければならぬ。役者衆は衣装がありますが、噺家は紋付き羽織袴だけで勝負です。こりゃ大変なことですよ。小さな子供から年頃の娘。侍でも大名もいれば浪人もいる。これも歌舞伎や先輩の噺家なんかの型を良く見て研究して自分なりの演じ型をこしらえていかなければならない。ただね、あたしが入門してすぐ、今輔師匠からお爺さんとお婆さんのしゃべり方を良く教わった。言葉は汚いんですけど、師匠が「ババアって言うてみる」って言うから「ババア」。「それじゃあジジイって言うてみる」って言うから「ジジイ」って言いました。実際に言ってみるとよく分かりますが、「ジジイって言うのは歯で言う。ババアっていうのは唇で言う。だからお爺さんをやるときは歯でしゃべれ。お婆さんをやるときは唇でしゃべれ」と教えてくれた。これはありがたかった。だから若い時からお婆さんを平気でやっていた。こ

んな丁寧で分かりやすい教え方してくれる師匠はそういませんよ。たいていは、聴いて覚える見て覚えるですからね。

——噺家にとって一番の基本、土台はなんでしょう？

やっぱり間でしょうね。間以外に何も無い。例えば『寿限無』なら『寿限無』をやっても間の良い人は受ける。間の悪い奴は受けない。だけどこの間が難しい。噺は教えることはできませんが、間だけは教えることができない。人によって全部違いますからね。だからあたし達の商売は早く自分の間をこしらえたものが勝ちですね。それには人の噺をよく聞くこと。いろんな人の噺の間を見て聞いて、間をつかむ。この人は間が良いから受けるんだな。だから自分はこうやってみようとかね。最初はもちろん人真似、師匠の真似ですよ。あたしでいうと今輔の真似。それから自分の間をこしらえていくわけです。お客さんによっても場所によっても、その場を読んで間を変えなければならぬ。これがまた難しい。間を心得ている噺家は間違いない成功しています。間をまったく心得てなくて、ただのほほんとしていけば何十年やっただって同じこと。もちろん噺を覚えるのもとても大事ですが、間をこしらえるってことが一番噺家にとって肝心なことだと思いますよ。

圓朝作品や古典落語への思い

——師匠は新作の名手から古典落語へとシフトした。その心は？

これにはきっかけがあつて平成七年くらいにある方が、『牡丹灯笼』の第一部の『栗橋宿』をあたしにやれって仰つた。即座に「できません」って言ったら、「いやできる」、「いやできません」、「いやできる」って押し問答が続いて、とうとう押しつけられちゃった。圓朝物は大師匠からちよつとは教わっていたんですが、まあやれって言うんだから

われわれ芸人は、みんなそうですけど、
これで良いって時はない



しようがない。まあまあ何とかできたんですよ。それでホッとしてよくよく考えてみたら圓朝物は誰もやらない。それじゃあ手がけてみようかっていうのが発端です。それから『牡丹灯籠』はもちろん、『真景茶屋』、『江島屋』なんかもやるようになった。そうしたらいつの間にか毎年八月の国立演芸場は圓朝物って決められちゃった(笑)。

——やはり圓朝作品は落語の中でも難しいのでしょうか？
——難しいけれども楽しい。まあ本当にやりがいがありますね。その代わり下手なことはできない。一度歌舞伎の村吉右衛門さんと国立演芸場で圓朝作品を絡めて対談したんです。そうしたら歌舞伎のお客さんがあたしの八月の圓朝物に来て下さるようになった。何で分かるかって？そりゃあ歌舞伎の方のご婦人は綺麗なお着物を召してお越しになるから、舞台からでもすぐ分かる(笑)。これはありがたい。ここでも歌舞伎観てたのが役だってますね。この間は『お熊の懺悔』という演目をやったのですが、これには長台詞がある。ただしゃべっていても面白くないから、三味線を入れてもらおう。お囃子さんと相談して長唄の『黒髪』を入れた。これもやっぱり芝居を観ていたおかげですね。圓朝師匠はじめ先達の師匠方が残してくれた素晴らしい演目を何とか引き継いで、今度は自分なりの圓朝物や古典をこしらえていかなければならない。大変なことですが、何としても続けて行くつもりです。

高座で聴く実演の落語のすすめ
——落語を敷居が高いと感じている人もいます。楽しみ方を教えて下さい。
——ただ理屈抜きに笑ってくれていいんです。落語なんか考えてみれば時代錯誤も甚だしい。でも、それを根掘り葉掘りに突いても面白くありません。そんなことは度外視してとにかく落語をそのまま楽しんで欲しい。そして落語

はとんだ馬鹿馬鹿しい噺の中にも必ず教えというものがある。人を騙すとこいう報いがある、良いことをすればこいうお返しがある。義理人情なんというのも全部混ざっている。何かその中からどんなことでもいいから一つでも気がついて教えるにしてください。ありがたい。まあ、まずは理屈抜きでとにかく笑う。それから落語が好きになるのも落語家が好きになるのも、これはお客様次第。好きになった噺家の独演会なんかに行くのも楽しいことだし、寄席に通っているんなら噺家の間を楽しむのもお薦めです。テレビやCD、インターネットなどで落語を聴くのもきっかけとしては良いですが、やはり落語は実演で聴くのが一番。収録したものと、当たり前ですが、何度聴いても間は同じです。ところが実演の落語の場合、同じ噺家で同じ演目でも間が聴く度に違う。一言二言余計なこととも言ってもあるし、実演でしか言えないこともありますしね。

——まずまず落語の魅力を追及されている歌丸さんですが、今後の活動は？
——もう自分の道を真っ直ぐに進んで行くだけ。あたしは落語以外に何にもできない人間ですからね。これから圓朝作品にも取り組まなければならぬし、他の噺も覚えなければならぬ。よく言われるんですよ。何でそんなに自分から苦しい思いするのかって。あたしは言い返す。生きていく以上は苦しい思いするんだって。それじゃあいつ楽になるのか？目をつぶった時、楽になるんだってね。さすがに目つぶってまで苦しい思いはしたくない。やっぱりわれわれ芸人は、みんなそうですけど、これで良いって時はない。目つぶった時だけでしょね。まだまだあたしは頑張りますよ。

PROFILE 1936年横浜生まれ。落語家。公益社団法人落語芸術協会会長。出陣子は『天魚館』。三遊亭圓朝作品などの古典落語を中心に活動している。横浜にぎわい座館長(二代目)。演芸番組『笑点』では放送開始からメンバーとして活躍し、現在は五代目司会者。1989年横浜市政100周年にて市民功労賞、芸術祭賞受賞。2007年旭日小綬章受賞。

桂歌丸 落語家

ロングインタビュー

